

令和元年6月23日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02200

研究課題名(和文) 1970年代以降の日本の大衆音楽における「ニューミュージック」に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive research on "new music" in Japanese popular music since the 1970s

研究代表者

広瀬 正浩 (HIROSE, Masahiro)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：80613299

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1970年代以降の日本の大衆音楽の「ニューミュージック」の文化資産としての価値を検証するものであった。ニューミュージックに関連する資料・言説を検証し、人的資源およびインフォーマントの聞き取り調査と分析などを行い、日本が高度経済成長期であった1970年代におけるアメリカナイズーションの中で地方都市が文化的アイデンティティを獲得していった過程を明らかにした。その地方都市のアイデンティティの獲得のために、新しい音楽と「アメリカ」のイメージが援用されたのである。また、本研究は、ニューミュージックについて語る多くの評論家がどのような「都市への憧憬」を抱いているかについても明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本の大衆音楽文化についての研究は、美学、社会学、日本学などの学際的な研究体制の中で展開しており、またグローバルな水準での議論の蓄積もある。しかし、ニューミュージックが学問的な議論の対象として注目されることはあまりなかった。その意味で、本研究はそうした学術的傾向を反省する契機となる。一方、ニューミュージックが勃興した1970年代からの経年と、それによる当時の音楽を支えてきた当事者たち(=人的資源)の高齢化が進んでいるため、本研究は、当時の状況を示す資料の保存・整理を行い、“生の声”による歴史を保存するという社会的意義を持つものにもなった。

研究成果の概要(英文)：This study examined the value of Japanese popular music 'new music' as a cultural asset since the 1970s. Examines materials and discourses related to New Music, conducts interviews and analyzes of human resources and informants, etc. I clarified the process which acquired the identity. New music and the image of "America" were used to gain the identity of the local city. The study also revealed what "longing to the city" hold by many critics who talk about new music.

研究分野：人文学

キーワード：大衆音楽 日本文化史 音楽文化論

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、1970年代以降の日本の大衆音楽に登場した「ニューミュージック」の文化資産としての価値に関する研究だ。ニューミュージックとは、音響的にはアメリカのポピュラー音楽の影響を受けながら、1970年代の日本の高度経済成長を背景に、“東京”のイメージを地方都市に流通させる契機となった音楽ジャンルである。そして、ニューミュージックに関わる当事者たちが、後に「Jポップ」としてブランド化されていく日本の歌謡曲の礎を築いていった。本研究を着想するに至った背景には、このようなニューミュージックの成立の歴史的経緯や社会的環境について検証することが、現在の日本が課題としているグローバル化した世界の中での文化資産の構築と発信に大きく関わるという事実があった。ニューミュージックの成立に大きな影響を与えているアメリカは、1945年以降の戦後日本にとって政治的にも経済的にも権威的な存在であった。日本とアメリカとの不均衡な関係性を基礎としながら様々な領域で異文化交流がなされ、日本文化のアメリカ化がそのまま「近代化」を意味するような状況の中で、日本の大衆文化が再編されていった。そうした再編の産物としてニューミュージックが存在した。したがって、ニューミュージックの成立過程や存在意義を検証することが、今日のグローバル化した世界における文化資産のあり方を考える上でのケーススタディとなると考えられた。

その一方で、日本の近代化を体現したニューミュージックは、その歌詞表現などを通じて、高度経済成長期の東京のイメージを担いながら、東京以外の地域で聴かれることとなった。ニューミュージックの流行は、今以上に東京都の格差が大きかった地方都市に東京のイメージを流通させることを意味したが、そのイメージの流通によって、日本国内の均質化・平板化が図られると同時に、地方都市の独特な文化をも生み出した。その観点から言えば、日本国内でのニューミュージックの受容過程を検証することは、「フラット化」が言われている今日の日本の文化的状況を問題視する上でのケーススタディともなるという状況であった。

(2) 日本の大衆音楽文化については、三井徹（編訳『ポピュラー・ミュージック・スタディズ 人学際的最前線』2005年、音楽之友社）や小川博司（『音楽する社会』1988年、勁草書房）などによって研究基盤が整えられた。日本とアメリカとの文化交流に焦点をあてた音楽研究では、終戦直後の日本の文化状況に焦点をあてた東谷護『進駐軍クラブから歌謡曲へ』（2005年、みすず書房）や、「米軍基地」という地域の個別性に焦点をあてた難波功士編『米軍基地文化』（2014年、新曜社）などの成果がある。また、この分野ではグローバルな研究展開があり、たとえば、マイク・モラスキー『戦後日本のジャズ文化 映画・文学・アングラ』（2005年、青土社）同『ジャズ喫茶論 戦後の日本文化を歩く』（2010年、筑摩書房）イアン・コンドリー『日本のヒップホップ 文化グローバル化の現場』（2009年、NTT出版）マイケル・ボーダッシュ『さよならアメリカ、さよならニッポン 戦後、日本人はどのようにして独自のポピュラー音楽を成立させたか』（2012年、白夜書房）Toru, Mitsui (ed.) *Made in Japan: Studies in Popular Music* (2014, Routledge) などが挙げられる。これらの研究は、音楽学に集束するのではなく、美学、社会学、日本学などの学際的な研究体制の中で展開しており、またグローバルな水準での議論の蓄積がある。しかし、この研究動向の中で、ニューミュージックが学的議論の対象として特化され議論されてきたとは言い難いものであった。その一方で、ニューミュージックが勃興した1970年代からの経年と、それによる当時の音楽を支えてきた当事者たちの高齢化が進んでおり、当時の状況を示す資料の保存・整理が緊急に行われなければならなかった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、1970年代以降の日本の大衆音楽に登場した「ニューミュージック」の文化資産としての価値に関する研究である。現在、「クールジャパン」などに代表されるように、日本のポップカルチャーを海外へ発信し、歴史的・社会的な背景が異なる地域における文化受容のあり方が模索されている。本研究では、日本が高度経済成長期であった1970年代にアメリカナイゼーション(=近代化)の成果として生まれたニューミュージックを研究対象としてフィールドワークを行い、かつての“異文化交流”がどのように展開されたかを実証的かつ理論的に検証することで、今日の日本の文化資産の価値の構築に寄与することを目的とした。

(2) 上の「1. 研究開始当初の背景」で述べたような現状を踏まえ、本研究では、ニューミュージックに関わった様々な当事者へのインタビューや、ニューミュージックを支えてきた音楽批評誌などにおける言説の整理・検証、音源そのものに対する学術的な分析など、総合的な研究を進めていくことで、世界と深く関わりを持つ日本の文化資産としての実態を明らかにし、その存在意義について新たな認識を呈示することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、研究代表者・広瀬正浩を中心に、研究分担者の水川敬章と、同じく研究分担者の馬場伸彦の3名で行った。広瀬正浩(研究代表者)は、日本ポピュラー音楽学会に属しながら、本研究の領域にも直接的に関わる音楽家・細野晴臣のエキゾチック音楽への取り組みや、音楽家・坂本龍一の音楽テクノロジーに関する思想などについて研究活動を行い、『戦後日本の聴覚文化 音楽・物語・身体』(2013年、青弓社)をまとめてきた。これらの研究業績の延長上に、1970年代の大衆音楽の問題を歴史的な文脈に即して整理した。同じく研究を担当する水川敬章(研究分担者)は、共著『イメージとしての戦後』(2010年、青弓社)などを通じて、1960年代以降の文学現象・雑誌・視覚文化・大衆文化などの諸表現の検討を通じて、戦後の日本文化におけるカウンターカルチャーの問題について論考を発表してきたという経緯を持っている。馬場伸彦(研究分担者)は、視覚文化論などを通じて都市表象の問題を考えながら、現代日本のポップカルチャーをめぐる当事者研究を進めてきた(『「女子」の時代!』2012年、青弓社)。これら三人の個々の研究業績を前提としながら、上記に示したニューミュージック研究における陥穽を補填する研究を総合的に展開していった。特に水川敬章と馬場伸彦は、ニューミュージックに関する人的資源およびインフォーマント(具体的には名古屋のニューミュージックの音楽家であるセンチメンタルシティロマンスのメンバーや、音楽評論家など)へのアクセシビリティを有しており、これを総合的研究のための手掛かりとした。

(2) 具体的には、主に三つの方法・内容(①~③)に分けられるものだった。基本的には①の調査を基盤とし、その成果を段階的に によって適正化した。 は、 および の成果を反映させながら行っていった。これらは相互に関連しており、並行的に遂行された。

ニューミュージックに関わる雑誌資料の書誌・言説の研究。ニューミュージックに関する言説の分析。人的資源およびインフォーマントの聞き取り調査と分析。当該のレコードのメディア的研究。これらを総合した、ニューミュージックの大衆音楽史・文化史的意義の検証。

の過程における研究成果の妥当性を検討する研究会・ワークショップの開催。

および を踏まえた、研究成果の論文化。

については、広瀬正浩(研究代表者)および水川敬章(研究分担者)が共に所属している日本ポピュラー音楽学会の全国大会の場を活用した。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果として、4本の論文の発表と、4件のワークショップの開催、1本の学会発表が行われた。特に(3)で後述する2017年12月のワークショップ「名古屋=西海岸 というファンタジー センチメンタル・シティ・ロマンスをめぐる都市文化/地域文化」は、本研究において最も重要な位置を占めるものとなった。

(2) 本研究は、1970年代の「ニューミュージック」について様々な角度から調査・検証を行うことを目的としているが、「ニューミュージック」の性格を特徴付ける要素の一つである「歌詞」に着目したのが、広瀬正浩[2016]および広瀬正浩[2018a]である。広瀬[2016]は、1970年代の「ニューミュージック」を牽引した松本隆の歌詞が、その時代的文脈を脱して捉えられるとき、どのような可能性と限界を孕むことになるのか、素描した。また、ポピュラー音楽における歌詞分析の難しさを確認した。一方、広瀬[2018a]は、はっぴいえんどの楽曲「風をあつめて」(1971年)が、2010年代においてもTV番組やCMなど、今日の様々なメディア表現において引用され、カバーされている。1970年代の時代性を色濃く反映しているはずのこの楽曲が今日の文脈において再演・再構成されるとき、果たしてどのような意味を持ちうるのか。この問題を「アダプテーション」という鍵語を手がかりにして考えた。ただこの広瀬[2018a]は、歌詞の問題だけに留まらず、「ニューミュージック」における音楽性の問題、あるいは歴史的な文脈に即したときの意義の問題をも含むものとなっている。

そして「ニューミュージック」の「記憶」というべき歴史的意義の現代的継承の問題を扱ったのが、前出の広瀬正浩[2018a]、広瀬正浩[2017]、および水川敬章[2017]である。広瀬[2017]は、1970年代の「ニューミュージック」に関連した2015~16年の4つのイベントに参加した報告で、各イベントの歴史的意義を押さえ、「ニューミュージック」論の基盤を整備した。この広瀬[2017]で呈示した問題意識は、後の(3)で言及するワークショップにおける広瀬の発表と連続するものであった。

一方、水川[2017]は、「シティ・ポップ」的なるものが画定し難いカテゴリーであるがゆえに、「的なるもの」とする必要があるとまずは断りながら、その「シティ・ポップ」の音楽、言説、イメージがどのように構築されてきたのかを整理した。具体的には、近年のシ

ティ・ポップ言説を分析しながら、聴取者としての経験から、洋楽をシティ・ポップの源流に位置付けた萩原健太の発言を重要視した。また、このシティ・ポップの政治学をさらに精緻に分析するために、シティ・ポップ的なものとの不和として浜野サトルが挙げているムーンライダーズや山下達郎を挙げ、シティ・ポップにおける「シティ」が「東京」的なものの上に構築された虚構的概念であること、そのアンチテーゼとしてセンチメンタル・シティ・ロマンスにおける名古屋的シティ・ポップをめぐる議論の可能性を紹介した。(長澤・広瀬 [2018])

- (3) 本研究の集大成として位置づけられるのが、2017年12月に関西大学で行われた「日本ポピュラー音楽学会第29回大会(JASPM29大会)」内で開催されたワークショップ「名古屋=西海岸」というファンタジー センチメンタル・シティ・ロマンスをめぐる都市文化/地域文化」であった。司会および問題提起を広瀬正浩(研究代表者)が行い、水川敬章(研究分担者)と馬場伸彦(研究代表者)も参加するほか、音楽評論家・音楽ライターの小川真一、「センチメンタル・シティ・ロマンス」のマネージャーであり作詞家でもある竹内正美も加わった。

本ワークショップは、1970年代以降の日本のポピュラー音楽に登場した「ニューミュージック」の文化資産としての価値に関する研究実践の一つとして企画・開催した。本研究では、音響的にはアメリカのポピュラー音楽の影響を受けながら、1970年代の日本の高度経済成長を背景に、“都市”のイメージを流通させる契機となった音楽ジャンルとして、「ニューミュージック」を捉えている。私たち企画者は、ニューミュージックにおける“都市”として一般的にイメージされている「東京」ではなく、「名古屋」という都市に着目し、名古屋のイメージを媒介として音楽活動を成立させてきたある音楽制作集団を対象とすることで、ニューミュージックをめぐる研究・評論を深めることを目指した。その音楽制作集団というのが、「センチメンタル・シティ・ロマンス」であった。

センチメンタル・シティ・ロマンスは、1973年に結成された名古屋のロックバンドだ。1975年に細野晴臣のプロデュースでファーストアルバム『センチメンタル・シティ・ロマンス』(CBS ソニー)を発表した。このアルバムの評価をめぐっては、『ニューミュージック・マガジン』誌上で評論家たちによる激しい論争が起こった。その一方でバンドは、活動拠点でもある名古屋をアメリカの「西海岸」に見立て、ウェストコースト系の音楽を追求しながら、シュガーベイブやその周辺のミュージシャンとの協働を展開させていった。

こうした彼らの活動は、1970年代の日本とアメリカ、東京と地方都市、などの間に設けられる様々な境界線が錯綜するただ中に位置づけられるものであるが、これらの境界線の画定とそれらの線の錯綜といった“文化の政治”にセンチメンタル・シティ・ロマンスはどう関与していったのだろうか。その政治は、1970年代に限定されたものなのだろうか、それとも現代とも通じるものなのだろうか。そして、これらの問題についての考察は、従来のニューミュージック論や戦後日本文化論をどのように再構築することに繋がるのだろうか。以上のような大きな問題について検証するための“手がかり”として、センチメンタル・シティ・ロマンスの活動の当事者や、彼らの活動を近いところから批評的に追いつけてきた評論家の“生の声”を採取しつつ、それらの声を歴史的に定位するということを、本ワークショップの主眼とした。

まず最初に、司会を務めた広瀬正浩がフロアに向けて問題提起を行った。先述のようにセンチメンタル・シティ・ロマンスの音楽は、『ニューミュージック・マガジン』誌上においてその質が議論の対象となった。小倉エージと中村とうようとの間の葛藤は、他の評論家や雑誌読者をも巻き込みながら約半年ほど論争が展開された。その論争においては、「ロック」の“真正性”、商業主義(コマーシャルイズム)、アーティストに随伴する評論家の立ち位置などが問題とされたが、彼らの活動拠点が「名古屋」であるという地域性については無視されてきた。東京と地方都市の格差は当時の日本社会において顕在的であったはずだが、その点が音楽の評価をめぐる議論において顕在化することはなかった。

このような当時の言説状況を確認した上で、二種類の“生の声”を聴く公開インタビューをそれぞれ行った。一つめが、水川敬章による、愛知を拠点に幅広い音楽評論を展開している小川真一氏へのインタビューである。水川は「シティポップ」の「シティ」なる語が東京・渋谷を指示する傾向が強いことを意識しつつ、そうした記号化によっては見えなくなってしまうような1970年代の地方都市の文化状況を小川氏から聞きだした。小川氏は、センチメンタル・シティ・ロマンスの音楽文化の背景にある若者文化として「アメカジ」「アウトドア」の流行を指摘し、また当時の輸入レコード店を中心とする音楽情報のネットワークについて解説し、名古屋という地方都市において「西海岸」的な音楽がどのように聴かれていたかを明らかにした。ただ、当時の名古屋は「西海岸」の音楽だけが優勢だったわけではなく、ハードロック系と「西海岸」系との対立やブルースが盛んであったことについても、言及してくれた。

二つめのインタビューが、都市文化研究を専門とする馬場伸彦による、当時のセンチメンタル・シティ・ロマンスのマネージャーであり作詞者でもある竹内正美氏へのインタビューである。最初に馬場が、徳川御三家の城下町として栄えながら、商業都市、軍需工業都市として展開していく「モダン都市」名古屋の写真を示していきながら、名古屋やその周辺の地

理的・文化的状況を解説しつつ、そして時に自身の経験談も交えながら「西海岸」イメージを呼び込んでいく名古屋の潜在性(緑地公園の点在、海岸までの近さ、道路の広さ、ロサンゼルス市と姉妹都市、など)を指摘した。それに呼応するようにして竹内氏がどのような戦略の下でセンチメンタル・シティ・ロマンスの活動を成り立たせていったか、経験談を語っていただいた。

フロアからも貴重な意見を頂戴した。「西海岸」のイメージの多様性に関する意見、地域としての西海岸と音楽としての「西海岸」との差異に関する意見であった。

歴史をめぐる多くの論者の発言を俟つまでもなく、歴史というものは過去の事象をめぐる記録によってのみ成り立つものではなく、そのような記録からこぼれ落ちてしまっているような、様々な立場の様々な当事者による記憶の語り、歴史を成り立たせている。しかし、そのような当事者は、いつまでも存在し続けているわけではない。本研究としては、記録されたもの(語られた記憶がアーカイブ化されたものも含む)を調査・分析するばかりでなく、まだ語られていない記憶に光をあて、それを大切にしながら未来へと継いでいくことに意義を見いだしている。そのような研究に求められるべき態度の一端を、本ワークショップで構成することができた。(広瀬 [2018b])

引用文献

- ・長澤唯史・広瀬正浩 [2018] 2017 年第 1 回中部地区例会報告 (『jaspm NEWSLETTER #115』 Vol.30, No.1、日本ポピュラー音楽学会、2018.3、pp.15～17、<http://www.jaspm.jp/wp-content/uploads/2018/03/NL115.pdf>)
- ・広瀬正浩 [2016] 「二〇一五年の松本隆の発見と喪失 一九七〇年代「ニューミュージック」の歌詞の成立(1)」(『言語と表現 研究論集』 Vol.13、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部、pp.5 - 17)
- ・広瀬正浩 [2017] 「記憶の中の音楽文化像 二〇一五年～一六年の幾つかのイベントに見る音楽文化/一九七〇年代「ニューミュージック」の歌詞の成立(2)」(『言語と表現 研究論集』 Vol.14、椋山女学園大学国際コミュニケーション学部、pp.21 - 31)
- ・広瀬正浩 [2018a] 「「風をあつめて」のアダプテーション」(『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』 Vol.49、椋山女学園大学、pp.77 - 89)
- ・広瀬正浩 [2018b] 「ワークショップ報告 A 名古屋=西海岸 というファンタジー センチメンタル・シティ・ロマンス をめぐる都市文化/地域文化」(『ポピュラー音楽研究』 Vol.22、日本ポピュラー音楽学会、pp.73 - 75)
- ・水川敬章 [2017] 「「シティ・ポップ」なるものをめぐる地政学」(日本ポピュラー音楽学会(JASPM)中部地区 2017 年度第 1 回研究例会・口頭発表、2017.11、椋山女学園大学)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

広瀬正浩、「ワークショップ報告 A 名古屋=西海岸 というファンタジー センチメンタル・シティ・ロマンス をめぐる都市文化/地域文化」、『ポピュラー音楽研究』、査読無、Vol.22、2018、pp.73 - 75
オープンアクセスではない

広瀬正浩、「「風をあつめて」のアダプテーション」、『椋山女学園大学研究論集 人文科学篇』、査読無、Vol.49、2018、pp.77 - 89
[https://lib.sugiyama-](https://lib.sugiyama-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2463&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

広瀬正浩、「記憶の中の音楽文化像 二〇一五年～一六年の幾つかのイベントに見る音楽文化/一九七〇年代「ニューミュージック」の歌詞の成立(2)」、『言語と表現 研究論集』、査読無、Vol.14、2017、pp.21 - 31
[https://lib.sugiyama-](https://lib.sugiyama-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2381&item_no=1&page_id=13&block_id=21)

広瀬正浩、「二〇一五年の松本隆の発見と喪失 一九七〇年代「ニューミュージック」の歌詞の成立(1)」、『言語と表現 研究論集』、査読無、Vol.13、2016、pp.5 - 17
オープンアクセスではない

〔学会発表〕(計 5 件)

広瀬正浩、水川敬章、宮崎尚一、長澤唯史、「なりきることの創造性、ミュージシャンの(への)生成変化」、『日本ポピュラー音楽学会(JASPM)第 30 回大会、2018.11、慶應義塾大学
<https://jaspm30.wordpress.com/%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0/>

広瀬正浩、村山和也、前口涉、長澤唯史、「音楽は映像を志向する ミュージックビデオが拓く世界」、日本ポピュラー音楽学会（JASPM）中部地区 2018 年度第 1 回研究例会、2018.6、椙山女学園大学

<http://www.jaspm.jp/?p=1802>

広瀬正浩、水川敬章、馬場伸彦、小川真一、竹内正美、「名古屋=西海岸 というファンタジー センチメンタル・シティ・ロマンスをめぐる都市文化/地域文化」、日本ポピュラー音楽学会（JASPM）第 29 回大会、2017.12、関西大学

<http://jaspm29.wiki.fc2.com/wiki/%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%83%E3%83%97>

広瀬正浩、村山和也、「オーディエンス/ファンの想像力」、日本ポピュラー音楽学会（JASPM）中部地区 2017 年度第 1 回研究例会、2017.11、椙山女学園大学

<http://www.jaspm.jp/?cat=15&paged=2>

水川敬章、「「シティ・ポップ」なるものをめぐる地政学」、日本ポピュラー音楽学会（JASPM）中部地区 2017 年度第 1 回研究例会、2017.11、椙山女学園大学

<http://www.jaspm.jp/?cat=15&paged=2>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：馬場伸彦

ローマ字氏名：(BABA, nobuhiko)

所属研究機関名：甲南女子大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：00411843

研究分担者氏名：水川敬章

ローマ字氏名：(MIZUKAWA, hirohumi)

所属研究機関名：追手門学院大学

部局名：国際教養学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00626070

(2)研究協力者

研究協力者氏名：長澤唯史

ローマ字氏名：(NAGASAWA, tadashi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。